

## 要 約

1. 今年度はタイワンガザミの種苗生産を3回(5月9日～28日、6月11日～7月1日、7月15日～31日)実施した。親ガニは前年度同様、与那城漁協と羽地漁協の漁業者から購入した。
2. 幼生収容予定の1週間前からメタ珪酸ナトリウム・のり用肥料・鶏糞水等の添加による水作りを開始した。基本的な餌料系列はワムシ、アルテミア、アサリ・オキアミミンチである。これに補助餌料として初期餌料と配合餌料を使用した。
3. 1回次～3回次ともゾエア期間中の飼育は順調であったが、メガロバ期に大量斃死があり稚ガニ生産は低調に終わった。今年度の稚ガニ総生産尾数は15.6万尾であった。
4. メガロバ期での減耗は前年度までのタイワンガザミの種苗生産でも頻繁に起こっているが、今年度は全滅かそれに近い結果が多かった。来年度以降の種苗生産ではこのメガロバ期の減耗をいかに抑えるかが、主要な課題である。今後、珪藻維持に重点をおいた安定した水作り法、ワムシ・アルテミアの栄養強化等を検討する必要がある。
5. 2回次と3回次に種苗生産したC<sub>1</sub>稚ガニの中間育成を行った。中間育成は種苗生産に使用した100㎡円形木槽を用いて行った。水槽底には塩ビパイプ製の枠(100×150cm)にキンランを結び付けたものを設置してシェルターとした。餌料はクルマエビ用配合餌料5～7号を使用した。1回目は6月28日～7月9日、2回目は7月30日～8月11日の期間で、それぞれ11.4万尾、4.2万尾を収容して開始した。取り上げ時の生残率は35～62%と比較的高く、2回の中間育成で合計6.5万尾のC<sub>1</sub>～C<sub>2</sub>を生産した。
6. 今年度は与那城村地先の海中道路北側の干潟水域にて、第1回次39千尾(平均全甲幅6.8mm)、第2回次26千尾(8.4)、計65千尾の稚ガニの直接放流を行った。
7. 放流稚ガニは放流後数日間で放流区域内の密度が急激に減少し、逸散がかなり早かった。
8. 天然稚ガニの定着は3月～11月下旬までみられ6月頃と8～9月頃にモードがみられ、前者より後者の定着群が多く、1991年と逆の減少がみられた。
9. 干潟でみられるタイワンガザミは2cm以下の個体が多い。
10. 与那城村、石川市、勝連、沖縄市、中城漁協の漁獲量調査を行った結果1992年の漁獲量はそれぞれ14.4トン、4.5、1.3、8.3、5.3であり、最も与那城村漁協が多かった。
11. タイワンガザミの平均単価は石川市漁協が993円と最も高く、ついで中城690円、沖縄市635円、与那城村563円、勝連459円であった。
12. 与那城村漁協に水揚げされるタイワンガザミは、雌雄とも夏場に小型個体が、冬場に大型個体が多く漁獲される。
13. 与那城村漁協のタイワンガザミの漁獲量と天然稚ガニ定着数及び稚ガニ総数(天然稚

ガニ定着数+放流数)とは、年による増減が一致している。

14. 与那城村漁協において、1963年に1992年より漁獲努力量が減少したにも関わらず、漁獲量、CPUEが増加したことから、与那城村海域のタイワンガザミ資源量が増加したものと考えられた。

## 文 献

- 鳥袋新功 (1990) 平成元年栽培漁業技術開発事業調査報告書。ハマフエフキ・タイワンガザミ。沖水試資料(111)、pp. 57.
- 鳥袋新功 (1991) 平成2年栽培漁業技術開発事業調査報告書。ハマフエフキ・タイワンガザミ。沖水試資料(113)、pp. 67.
- 佐多忠夫 (1992) 平成3年栽培漁業技術開発事業調査報告書。ハマフエフキ・タイワンガザミ。沖水試資料(115)、pp. 69.
- 佐多忠夫 (1993) 平成4年栽培漁業技術開発事業調査報告書。ハマフエフキ・タイワンガザミ。沖水試資料(116)、pp. 58.
- 渡辺利明 (1989) 昭和63年栽培漁業技術開発事業調査報告書および栽培漁業技術開発調査報告書(昭和59-63年度)。ハマフエフキ・タイワンガザミ。沖水試資料(109)、pp. 114.